

知財のドリームチーム

——Liking-Chartからの夢想——

澤 井 敬 史*

Liking-Chart ???… いえいえ決して怪しいものではありません。人財についての夢を描き立たせてくれる不思議な図です。

知的財産という言葉が市民権を得たせい、知財の分野に入ってくる人達が間違いなく増えています。

ところで人々は職業分野を選択するとき、どんな基準で選んでいるのでしょうか？ 振り返ってみれば筆者は相当にいい加減でした。あまり人がやっていそうにない（やりそうにない）、組織に縛られたくない、技術と社会との接点がありそうだな、などと何も考えていなかったこと夥しいです。普通だったらもう少し真面目に（？）考え、専門性が活かせるから、お金が儲かりそうだから、将来が安定していそうだから、なんとなく格好いいから、世の中で注目されているからなど、それらしく選ぶべきだったのでしょうが…。

ともあれ、職業の確たる中身が分からないまま、そのときどきのブームやもて囃されている職種に多くの人になびくのは致し方ないことなのかもしれません。しかし、企業寿命30年説にもあるように、ある分野が30年以上の長きにわたり成長し続けることが殆どないのも事実のようです。エネルギー政策の転換前に“黒いダイヤ”といわれた石炭関係の産業しかりですし、戦後の復興期に“三白”（セメント、砂糖、紙）といわれた分野もそうだったのでしょう。

それでは、今ブームのような状況になってい

る知財分野に向いている人とはどんな人なのでしょう？ この分野で仕事をするには、「3C on C」と名づけた図1のような資質が備わっていると良い、と筆者は感じています。すなわち、知財も含めすべての事象が社会の営みの中で扱われるものですから、社会性（Common Sense）を基盤としていることが不可欠で、その上で文系や理系の区別なく幅広い好奇心（Curiosity）を持ち、課題を解決する策を考え出す創造性（Creativity）に富み、いろいろな人の考えを理解し交流（Communication）できれば良いと感じています。一言でいえば、いい意味で個が自立している人です。もっとも、このような資質の人は知財分野に限らずに、どの分野でも喉から手がでるほど欲しい人財で

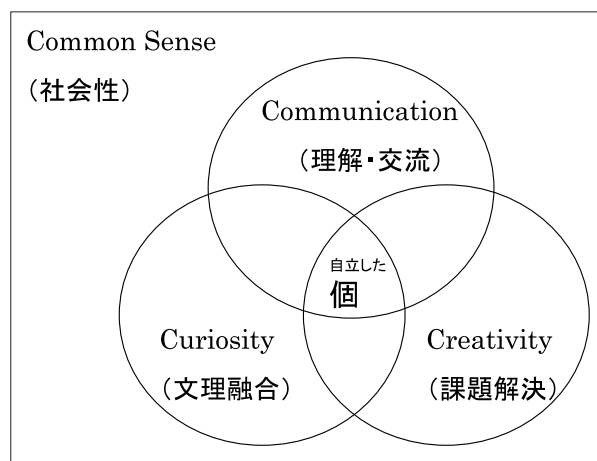


図1 3C on C (資質)

* NTTアドバンステクノロジー株式会社
知的財産事業本部長 Takashi SAWAI

※本文の複製、転載、改変、再配布を禁止します。

しょう。

そこで、別の視点に立ってもう少し感覚的に捉えてみます。「好きこそものの上手なれ」という諺があるくらいですから、「好き」という感性を軸に据えて人財を考えてみることにしました。好きなことであれば、どんな難しい状況に陥ったとしても、考え抜く力や踏ん張る力が備わっていて、その窮地を切り拓いていくことでしょう。そうであるとすれば、いま知財の分野で活躍している人達はどんなことを好きだと感じているのか、ヒヤリングしてみるのも意味あることだろうと考え、お遊びに一つの図を作ってみました。好き嫌いといってもいろんな軸がありますが、独断と偏見で作ってみたのが図2のLiking-Chart（筆者の勝手な命名）です。横軸は、あえて言えば“人（Human）”と“もの（Object）”を比べてどちらが好きなのかといった相対的な判断です。縦軸は、好きな科目がどちらかと言えば“理系（Science）”的なものなのか“文系（Arts）”的なものなのかという相対的な判断です。この2軸で好きな方を選んでもらうと、4象限のうちのいずれかに分類されることになります。次いで、それぞれの象限の中で、“幾何（Geometry）”と“代数（Algebra）”のどちらがより好きだったかという選択してもらいます。文系科目が好きな人は、そもそも

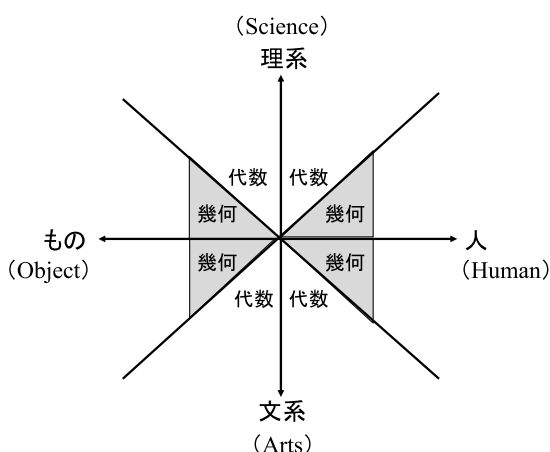


図2 Liking-Chart（好きなエリアはどこ？）

数学が嫌いだから幾何も代数も選びようがないと答えるかもしれません。しかし、そこはあえて答えてもらうことにします。中学のときに“図形”と“方程式”のどちらにより親近感を抱いていたかという程度でよいです。

試してみると、これが結構面白い！ 知財の分野で何人かをヒヤリングしマッピングしてみましたが、仕事の内容に応じてそれなりに偏在する領域（エリア）があるようです。横軸は人間臭さが好きか嫌い、縦軸は価値の多様性を抵抗なく容認できるか否か、“幾何”は直感性重視で“代数”は論理性重視、といったことに通じているようです。この好みのエリアは、必ずしも固定的ではなく、年代や経験の度合いによっても変化するようです。エリア同士の相性のようなものもあるようです。知財分野に限らず、いろんな分野の職種について調べて分析してみると興味深い結果がでるかもしれないと感じています。

最近読んだピーター・F・ドラッカー氏の「ドラッカーの遺言」（講談社）の中に、次のような趣旨のことが書かれていました。——現在はグローバル化した『情報』によって世界が強固に結びつく時代への転換期であり、新しい時代においては知識労働がますます重要性を増し、国際競争において意味を持つのは唯一、知識労働の生産性を高めることである。しかし、優秀な知識労働者であればあるほど、自分の専門分野で働き続けることを強く希望している。そこで、彼らの生産性を高めるためには、さまざまな専門知識を有する知識労働者を集団にしてチームとして機能させることが必要不可欠である。——

さて知財専門家の仕事の一つに、技術開発者の頭の中にある技術的発明を上手に抽出し文章化することで法的発明に昇華させ、審査を経て使える独占排他的な権利にまで仕上げる仕事があります。これは、創造性を必要とする情報の

※本文の複製、転載、改変、再配布を禁止します。

高度な編集といってもよいでしょう。このように創造性を要求される知財の仕事は、まさに頭腦的なもので知識労働の最たるものです。それゆえに時代の転換期にあっては、知財分野の人財は、技を極めなければいけない職人と同じように、常に自己を研鑽し続けることが求められるでしょう。

そして、これからの知財分野では、ドラッカー氏が指摘する「知識労働の生産性を高めるために、知識労働者をチームとして機能させること」を、いかに実現していくかが重要な課題になると思われます。知識労働者がチームとして機能するためには、自立した個が組織の掲げる理念やビジョンに共鳴し戦略の意図を理解し、

自ら専門性の枠を越えて生き生きとした議論を重ねることが、不可欠です。先に述べた「3C on C」の資質を持ちLiking-Chartの各エリアに位置するさまざまな個性の知識労働者を束ねて、それぞれのエリアの適性をうまく組み合わせることで、組織ベクトルに沿った相乗的な知を編み出すことができるなら、それはまさに知財のドリームチームと呼ぶに相応しいものになるでしょう。

ふっと気が付くと、Liking-Chartを眺めながら、知財のドリームチームを編成する人財を夢想している楽しげな自分がいました。皆さんもLiking-Chartを楽しんでみて下さい。

(原稿受領日 2006年6月15日)

